

「えがおねっと」の活動を通じて、「人のために」と思うことも、相手の「人として」の矜持を汚すことなく、欲しい人に欲しいものを届けることの難しさを知りました。



長谷 浩子さん  
(米山町清水)

支援をした避難者の中に友人がいました。私は、この地から離れない限り一生彼女たちの隣人です。隣人として尊敬し、大切にしていきたい。お互いに「お互い様」と言える関係でいたい。心からそう思っています。



小野寺 寿美子さん  
(中田町新小路)

暑い中での仕分け作業も、被災者の方々の笑顔と「ありがと」と涙ぐむ姿が後押しとなり、何とか続けられました。「何かをしてあげる」

のではなく「何ができるか」を考えながらの活動でした。



皆川 洋子さん  
(迫町光ヶ丘西)

みんなで心を一つに活動できてよかったです。日本は、お金も物資もこんなにあるのだと思いました。多くの支援物資は大手商社からいただいたもの。地元商店の活性化にはつながりにくいところがありました。



小野寺 範子さん  
(迫町錦東)

大きな力となりました。

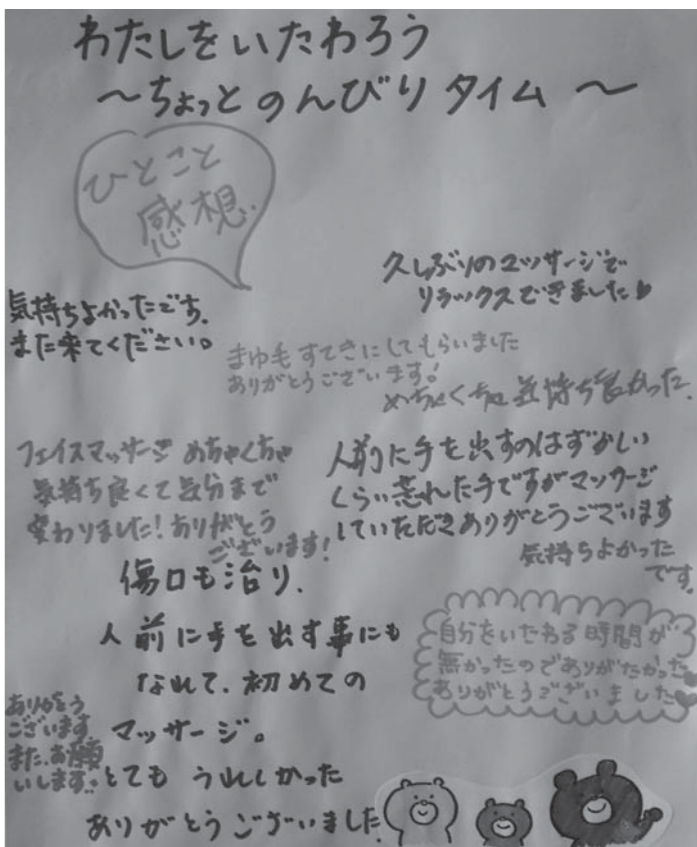
「女性支援の『えがおねっと』です」と支援を呼びかけても、こんな小さな団体には協力してもらえないのは難しい。それが、登米市が後方支援をしているという情報を発信すると、信用支援というものが得られて続々と物資の提供があり、さらに集まった物資の置き場所にも市の支援をいただきました。

### 調査票に回答した人だけ 支援物資を手渡すことに

「えがおねっと」の活動の始めとして、まず市内の避難所にいる430人の女性たちのニーズ調査を行いました。イコールネット仙台と市民活動支援課の協力でパーソナルリクエスト票という調査票を作成。市民活動支援課には、そのパーソナルリクエスト票の配布と回収、そしてデータの整理もしていただきました。

このパーソナルリクエスト票というのは一枚の用紙ですが、身長や体重、年齢のほか、使用している化粧品や生理用品のメーカー、下着のサイズなどを記入していただき、中身が見えないようにリクエスト票を折って回収するつくりにしてお渡ししました。

リクエスト票を回収したときには、430人のうち276人の方から回答をいただきました。「えがおねっと」としては、回答をいただかなかった方には物資をお渡ししないことに決めま



「えがおねっと」が企画した、避難所の女性たちにフェイスマッサージやハンドマッサージ、ティータイムを行う「わたしをいたわろう～ちよっとのんびりタイム～」。女性たちから寄せられた手書きの文字には、感謝の思いが込められていました

した。避難所の女性に女性用の物資をただ配布するというのでは、今までの物資支援と同じになってしまいます。私たちは、困っている女性に必要なものを、きちんと意思のキャッチボールをしながら渡すからこそ意味があると考えました。

### 寿司やステーキはよくても 女性化粧品はぜいたく品？

5月の下旬になり、化粧品メーカーの協力で「わたしをいたわろう。ちよっとのんびりタイム」と称して避難所の女性にマッサージやティータイムをして、化粧品を支援物資として渡せる準備が整いました。

早速避難所の男性代表者の方に、「こういうことをしたいんですけど」とお話ししたところ、一部の避難所の男性代表者から「避難所生活に化粧品のようなぜいたく品は必要ないよ」と言われました。そこで、4月に私たちが避難所を回った時に聞いた女性たちの声や「今の時代、化粧品は女性にとって日用品の必需品であって、決してぜいたく品ではないんですよ」ということを訴え、何とか開催の許可を得ました。

### 震災前は当たり前モノ 一人一人の物資を袋詰め

そして5月の末からメンバーそれぞれが自分の仕事の合間をぬって本格的に物資の仕分けをしました。私もこの頃に震災の影響で遅れた田植えをしました。日中「えがおねっと」の「仕事」をするために、朝4時に夫と二人で田植えをすることもありました。付き合わされた夫にしてみたら、たまったものではなかったでしょうね。

メンバーみんなで、山のような物資の中から276人分一人一人のサイズに合わせた下着類などを探し出し袋に詰めていきました。6月の初めに一人につきレジ袋3個分の物資の配布ができました。中身は、化粧品や下着、生理用品、裁縫箱など、どれも震災前には当たり前のように自宅の引き出しや洗面所にあつたものばかり。渡した方からは「こんなにももらえるの」と、と

### 女性が明るくなると 周りまで明るくなる

その「のんびりタイム」も各避難所で開催され、私たち「えがおねっと」はマッサージを待つ間に皆さんとお茶を飲みながらお話をさせていただきました。はじめは皆さん、構えていたのですが、自分からだんだんと津波の話や当時の大変だったお話を話し始めました。大変だったことを誰かに聞いて

### ここまでしてくれるの 驚きと感謝の気持ち



小野 洋子さん  
(南三陸町入谷)

震災前は南三陸町の戸倉地区に住んでいました。津波で家が流され、今は南三陸町の入谷小学校のグラウンドに建てられた仮設住宅に、家族6人で生活しています。震災後は、登米市の避難所になった登米武道館などで生活していました。「えがおねっと」の須藤明美さんたちと初めてお会いしたのは、登米武道館で被災女性のフェイスマッサージなどが行われた時。その後、支援物資として自分に合った下着や化粧品をいただきました。「ここまでしてくれるんだ」と、その心配りに大変驚いたことを覚えています。須藤さんとは今でも交流が続いています。

# 「あんなに笑顔の母ちゃんを初めて見たよ」 開催を渋っていた男性からも感謝の声

特集

必要としている  
あなたのために